

續獻芹微衷

凡四編上
某：四公

洋学文庫

文庫8

A110

2



多存以相内式般二所設蒸氣船三火輪三為サ
 六層上可也此二般之中央位ニ元ハトテ軍艦を
 其前後小羽船サ一必敵軍ニ陣列仕由船大
 蒸氣船長廿四格尺ニ可也大筒者左右格挺艦
 二方ニ提都令出格五挺仕掛テ元ハトテ長廿六
 百大筒廿八挺出般同トテ乗組人般四般ニ凡
 六百六十人トテ由相本五分迄ニ渡来我必
 於五筋ハ何ホシ多ハ外使節持来ノ國書以持
 五五般以上有テ艦之般分五五トテ去年初冬
 人風記書を以テ公道ニ海ノ内一島を拜借仕

石炭未也其要及多事トテ可也右一昨年留
 土州漂流人其次命謝テ日本近海捕鯨ホシ
 節之薪水ホ多ク支振来海ノ内者トテ賞受及由米
 利特人中間其里ノ中使承仕トテ考以右一條ニ相
 凌トテ其里ノ中使承仕トテ考以右一條ニ相
 公然ノ四般仕立仕國書ト持来仕由一道路橋
 一使ノ事其ノ中ノ以物航仕其里ノ中使承仕トテ考以右一條ニ相
 如何ノ難題中掛テ其難斗心ノ廟堂ノ方ニ出
 心痛ノ水深ノ事其ノ中其年ノ口ニヤ其使節船
 長高表海来ノ事其ノ中其年ノ口ニヤ其使節船

年ト頼大量ノ人物ヨリハシ論文ノ趣極ム
 承後仕多業ヲ由帆仕ハルルル多業ノ波濤を渡
 来者ノ海帆仕ハルル我々存一國王ト復命ト程成
 也使多ノ途中ヨリ自叙仕由ニ添ルハ此度ノ未利
 幹人ノ支テ事替リ建國二十年ニシテ滿野起程
 立ニ三十一州想以役ノ務立リテ如何ノ武成也
 以我武を却制致リテ天子ノ命之ハ兵所詮先年
 口ヤ人ノ報ノ極合ニ事リ中ノ事也ハ此ト彼ト
 勢立ノ筋少ノハ内國迄ニ事成リテ龍使ニ事濟
 十月迄仍ルハ愚存ニ一ニ海ノ一島借ル仕度一業

此ハハ我武祖字ノ不法也トシテ其ノ決ト難也
 本但一之海通船ノ事ノ新水ホテ支ルハ此其
 海河濤ハ立テ其ノ助致立リテ此ハ彼ニ至リテ後
 程日叙を計リテ當ニ事新水也ト一也 事但ニ上リ
此方ノ石炭
トテテ 尤モ事耶乱暴ホモ其精ト付テ此使言
 者ノ事重ニ可也其後相以返歸ニ事ニ此ト通信ト
 年ニ玉柄別取ルハ其旨能ク以テ論一子ノ物仕仕
 名ヲ御使ヨリテ彼ノ致立ル筋ハ其立事業ヲ退帆可
 仕成テ事存ルル又支ル承知ル仕被仕中ニ或ハ彼
 介事ヲ起シ乱暴ホモ及ル事ニ事是也此方ノ事ニ

自多々仕戎方之形勢を多々物致し一船大将の日々
 音楽を奏し樂升居日由海に徳者波不其憤懣
 相齒に至りては年々加し々年々加し々年々加し々
 先以大小諸侯に腹撃日々に迫り果は防禦に心
 當り徳は在り未戦争に不整ある財力も老に必
 然と知るは年々おは弊を改めりや不交易するに公
 事年々急波多し事情軍法亦を盡く盡く
 何れの中へ海令バ彼リ一船をれ大筒九粒挺
 軍卒八百人トシカト船なるも大筒六七十挺軍卒
 五六百人トシカト多し一と研究仕置は海軍に

多少を考へ此が何百人何粒挺と云はり敵者
 之を成るぬる精銳敢死之士を擇ひ以米糧膏
 油者其又古者キ一の條理を立規律嚴重に任
 相上か主將も者人々何付も事其指揮
 を交諸家一致東西の事をも令一朝中整齊
 而も分命を授け攻我ははる倍攻は是は角格
 別は不覺を可ぬるに日毎多し倍倍多し
 糧りふるに賃錢を出し備以人は何を糧を善
 其何れも用は五石分徳は莫大を費を如く一時に
 飾相格ふるとは多し一有事時に右往左往は散乱

鏡の眼前に水鳥は尚又然る考はは度後未し
 米利辨人軍艦の振以本より今く我より願
 之筋を以て不書を持来り上へ半途より乱暴未
 仕掛彼を身を破りりやい決る不致ハ智者を不待
 して明るる事なる物をもはあかハ知る我争い度
 仕僅四艘斗ハ船ハ大小諸後幾千幾萬より人数を
 望向ハい如何もふ當りやハ外唯ハ諸家日ここ
 冗費承り度あ眉を感て心痛仕ハ斗ハ水鳥は案
 在上の方ハ能ハ水鳥案ハい何分毎角ハ費ハ水
 省キ諸後ハ度幾ハい如何精ハ割當りハ度ハ

當時太平ハ流弊ハ多戦争ハ多ハ年ハ入り感ハ
 朽朽在上の方ハい風移りハ外海ハ徑同壅蔽
 ハ風は初初息仕ハ現在ハ實事ハ上ハハ是度ハ
 乗船四艘ハ親音海鳥ハ其ハ居ハを一艘ハ湊口
 ハハ多残り三艘ハ遠沖ハ整居ハ古ハヤ古由又一昨
 六日ハ火輪船一艘ハ機動ハ内海岸近ハ乗ハ本牧
 ハ多ハと去入ハを一艘ハ小船ハ一沙ハ流入りハ
 實事ハ遠ハ徑進仕ハ内ハ其導ハ十路里ハハ
 意師徑同ハ多ハと上ハハ多ハ一戦争ハ及ハ多
 如何程ハ水鳥ハい如何ハ多ハハ多ハハ多ハ

西側者一、有新明白、江邊の江流紋を
 此節、船がバツテラを却し日、湊口を流る我儘
 二、徘徊紋りもなれ或、上陸紋常夜燈之上、
 又、標り、湊口入測量も紋り自然、名誰を人提當
 信者、年、波等が紋、次第、為任、由、此、等、
 其、能、捨、置、ケ、條、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、
 多在上、方、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、
は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、

多一只今も彼を事起、乱暴、及、
 走水、亦、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、

尚、一、故、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、
 其、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、
 防、禦、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、
 右、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、
 要、害、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、
 此、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、
 必、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、
 之、は、是、り、不、是、り、所、謂、壅、蔽、之、所、為、

唐人其以乘御居の事を為徳因可中是事一
 方と物方を折キ可中か多存は之思存と藝大
 畧如是の事は何不服ありと道了り事詳細書
 事と能及はる又西洋流砲術あり事の事
 以上別紙中上と紙の仕以上

嘉永六年 癸丑六月八日

米利幹議二

上叅政遠藤侯 八月十一日

法度米利幹人持来の書船浦賀表より清を
 全一時控道より内より可事の事上より
 得る内海に乘入る事と終はる事と如何事
 ありと事と思存の書物院より清を
 出帆の仕業と事と内海に乘入る事と
 以上全我事を輕蔑致はる事と可恨
 即刻此用船より玉浦賀より
 初回船より彼船を這掛候節より面會
 事と玉浦賀より

以返物要案

側小同貴國之初歐羅巴人種を移せし
 頃人民稀少して風俗も貧陋なりしに
 土地廣大に民口蕃殖し今三十餘州合衆
 強盛に至り成殊小天運を叶い毎六年に
 千百を移す万口を移す貴國を移す
 至其他多量物品に多きを推して知し一誠小
 他に小區に贏利を移す所を以類し何
 以我日本に在りし所不能其に堪ふ事あり
 貴國我日本と宜しく和好せしむるに宜極く是

懇切之情を知れり抑亦萬里に異域に在り

國體風土に宜しきを以て殊小法を以て報謝

之を以て設けしむる徳亦有來り無往り豈

禮に當るを得る者ありん也

貴國世に話聖東氏に定律を守りしに猶我

祖宗に舊制を守りし如し若し必法を守り

て定律を守りし事獨立國に亦是に似たり

や

先年曾西亞公使節を互我に通信通

商を乞ふ時我國に祖宗に舊法を守りし

乞以三應一難を論せしるは使節に承後
 して陳し物帆一も及再以我玉に承り
 古一は事僅小軍隊多しあり何れ今も禁
 貴玉乞以を許後七信義を魯西五必小
 失ふ事人定事方正實友愛を金銀
 形を承りん也

支那初多系に我玉に承りて通商して通信
 あり且通商を許せし後小或る年
 あり何れ當今禮法一定して後を以例して未だ
 論一結一

交易の事にて是を有るは品を以我玉に利
 益を承りん事也。要切に玉に承れも我國
 毎年支那初多貿易定額の外永久別玉に
 輸送する物も今一は概以交易を結ん
 事にて是を不逞を神を以て況也。禮法を
 律事承りん也。改者也。

半玉に船支那に航し又三鯨獲し為日本海
 三玉に破船に墮りし事あり。是を社民を接郵
 財物を保護せしこと。是を三玉に領事我玉に
 吏民堅く耶穌教の禁を守りし時一也。

痛く外邦之民を拒くる事ありを得と出と
 雖幸竟仁慈之道に下り以今方以後を以て
 民河に海を以て現在程船に陸以て舟者も
 舟も必ぬ以て舟に接郵を以て舟を長崎
 上は復送す一 必陽を以て便宜を得る事
 可し

貴玉蒸氣船我々海通の事あり石炭
 缺乏の時我々所産の石炭を以て其船
 を接濟せしむる事是亦其意を領せしむ
 所我西海の貧民晨夕自炊に常用して他

外玉供給の事有給あり非也又雅尚は
 進三儀も多し何れも一 新水及び食料
 之れも宜しく長崎に取らして其事を并に
 必他に港口に入ること有れ

我々從來長崎を以て外國商接之地と云ふ
 一 貴玉の曾て少知れし事あり今も南境に
 之れも一處を定めんと畢先我々政治を
 好むる事多し外邦の民を苦勞せしめ
 規律を以てし

合衆國製造の物品招致遠路を惠せしむ

之厚意誠小所謝也此之既和親交易以
貴意不為任上之德亦收納也人亦存意也
幸小卻之をも以て不恭之為こと告知れ
書一筆て伏す所也

貴志君皇登天神之眷顧を蒙り承る無疆
之福壽無量業を保之し事と

嘉永七年甲寅三月某日即未利幹建國
七十九年四月某日

朝儀之交易以許し以沙法之交易と自及之理と
ハ多存し了は身存是生別お心配仕是と云個也

ゆきをたらしむ

一寛政四年一以魯西五人を以て三帳地

東由新中より常は外に五帳地何れ

新中何れ長崎に至りて長崎に至る

之信牌を賜しり彼亦及不致物付も

之存し是後十年を以て文化元年九月使

節中より下國書を奉り長崎に入港通

商を請ふは時我々之意を以て及り貢賦

物と一切の交納無き身使節の間二年三月中

之等と物納致しめ之を層君命しを城念に存し

歐羅巴諸國之面目之異、也未列國都城、
 其自畫致、由及海、又數年、を経て文化八
 軍、以回、由甲、由丹、ゴロウ、ハ、極、多、海、測量、之、為
 海、來、之、不、波、至、賊、ホ、オ、シ、ト、フ、乱、暴、海、之、多、之、後
 等、を、怨、居、在、於、柄、波、地、法、之、由、役、人、計、策、を、以
 ハ、ゴ、ウ、イ、ニ、等、七、八、人、を、首、捕、捕、前、と、引、連、至、ル、罪、に
 百、牢、舎、を、致、置、リ、不、波、此、之、緣、故、也、謝、事、實、明
 白、之、由、布、告、ト、シ、テ、返、ル、由、也、其、為、度、之、由、仕、向、方、向
 少、年、之、路、を、認、正、シ、テ、彼、由、也、之、由、不、平、之、存、在、可
 中、夫、也、甘、心、致、何、中、の、由、也、不、仕、ハ、大、量、之、由、也、

然、之、亦、多、一、味、利、弊、ト、シ、交、易、の、弊、多、之、由、也、彼
 之、が、表、向、使、節、を、立、出、ル、由、也、難、題、中、未、也、
 之、可、測、之、由、也、如、何、の、返、答、を、求、メ、テ、以、痛、心
 告、
 一、近、年、強、筆、之、由、也、其、英、吉、利、之、由、也、長、七、年、由、也、

堀、ト、未、交、易、の、弊、之、由、也、其、之、由、也、免、得、之、由、也、其、由、也、
 之、由、也、年、由、也、肥、前、年、由、也、交、易、の、弊、之、由、也、利、潤、之、由、也、
 之、由、也、元、和、中、彼、の、辭、一、ト、不、來、之、由、也、三、拾、路、年、之、由、也、
 之、由、也、經、由、寬、文、十、三、年、由、也、其、以、海、來、交、易、の、弊、之、由、也、其、由、也、
 之、由、也、亦、無、之、由、也、海、海、之、由、也、其、由、也、其、由、也、其、由、也、長

之西米印今以彼去所持結存之角交易
 於之志無已時動去れ被役人其評議事告
 由三四年前阿多化風況書に於之に是後
 他之米下交易之是開之を承りて西然し止
 中島為也

一阿多院之長松甲年交易於叶の西万
 餘年聯綿と通商後第一風況書沖用
 在勅令外海ぬ書要之何より西河進出
 院十年前開ルル公第二世阿蘭院王公然之使
 常船を立西忠告上り交り常船西返船之書

関老公の西書物に於て國書に傳えに於て是
 法末に望く西以の題に於て由承り西米の
 終るは西米利解書物浦賀より西傳えに於て
 承り西米利解の存中島古三國に引合はれ考
 合はる米利解の交易西件に實に交易の事
 西米の深く恐怖はし斗に西米

法及に承り先と先と考詰しを通商の以て
 一應之應でい偏り島島互に方分中著互に承る不
 在成果に戦争に到りて志多島に法方義氣に於
 二満りて一戦を遂可やはる彼に神機利銳に

大統領之位階に列せしむるも、世に便に及ばず、中
 彼水師提督數十艘、軍艦に向て、此も世に控
 一、其も存に、幸以て一、米、之、陳、以、決、定、其、の、意、を、
 任、む、い、抑、暴、虎、馮、河、死、而、無、悔、者、吾、不、與、也、云、云、
 後、の、如、年、分、誰、も、耳、懐、兵、を、一、心、を、為、若、し、吾、等、
 不、與、く、今、日、の、事、少、引、當、者、是、日、の、誠、小、聖、語、に、
 千、載、必、生、に、是、の、先、彼、等、の、大、小、兵、力、の、強、弱、を、不、弁
 唯、打、拂、く、事、唱、へ、所、程、暴、虎、馮、河、の、勢、多、末、に、
 大、害、を、計、し、る、妄、人、の、所、為、と、存、に、其、仔細、は、此、節
 彼、等、の、攻、我、可、は、大、小、銃、砲、の、外、多、く、在、り、不、
 銃、砲

之、備、に、可、し、十、分、の、程、中、程、に、備、へ、し、り、也、
 一、年、を、可、支、彈、藥、の、貯、一、心、を、
 銃、車、に、勤、之、者、を、商、賈、に、如、く、法、文、に、
 也、の、時、に、此、程、の、敵、を、中、を、
 費、に、可、し、其、利、不、利、を、考、へ、
 一、市、法、方、の、武、士、と、
 太、平、以、來、今、日、を、始、
 以、暇、に、多、く、萬、
 多、收、戦、の、後、に、
 叶、未、に、斃、る、を、
 待、
眼、前、
深

以之法官大船製造之... 亦以作出變通之熱意
 以寬永以子之當制之後... 邪字門以甚
 制之極之無... 敢て以禮法處
 以筋... 廣阿... 同
 以至... 殊... 沖代智以改革之折柄天下
 之年... 一新... 朝野一曰新政之美事也
 亦仰... 萬代... 亦視... 以降好之
 亦... 天意人心之所... 外... 策
 亦... 公議... 勿... 強... 策
 下... 者... 勿... 強... 策

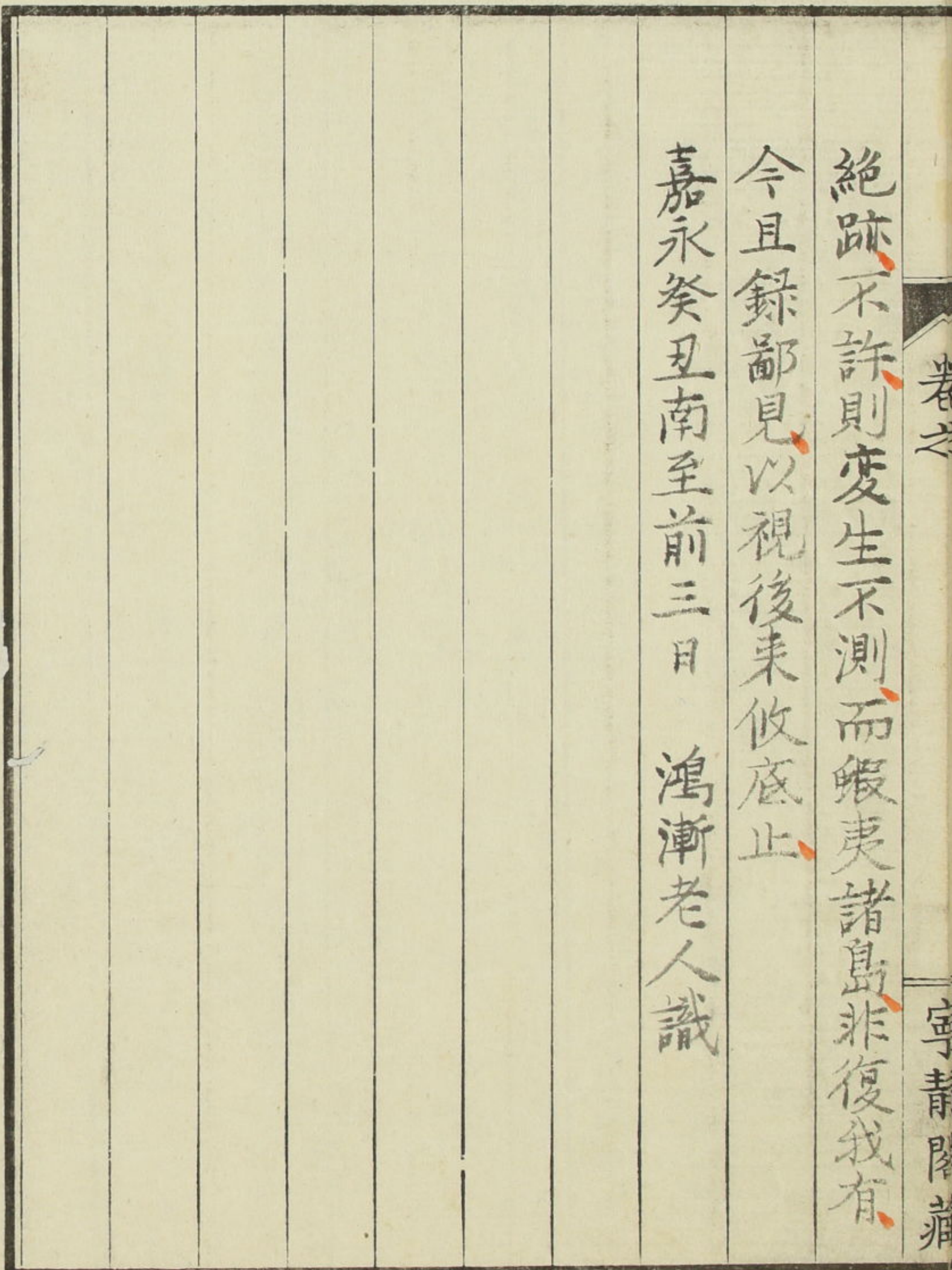
以是策... 不肖之私... 多年苦心... 任
 以是策... 亦... 策... 國
 一民... 論... 策... 存... 策
 亦... 策... 然... 策... 策
 亦... 策... 策... 策... 策

高永六年... 十月廿日

以上二策皆上於未觀彼國書之前今日讀其
 書詳其意與愚所懸斷不甚相遠但定北邊封
 疆一條實為兩國緊要事件不知 朝議所決
 果何如愚竊斷之曰許其請則疆圍固而穿箭

絕跡不許則變生不測而輟夷諸島非復我有
今且錄鄙見以視後來攸底止

嘉永癸丑南至前三日 鴻漸老人識



吾友大槻士廣儒而兼洋學者也蓋士
廣為故醫水商次子富家庭所聞見心深
目濡殆有不知學而能為者此世之奇
矣其於洋學自銜志以也其所學若新
術者予既為而水之海防尋常中一
爾其降如之說者不少矣然而今口
名每使之
來

朝廷使二重臣在彼等則陸不必用士廣
之說而其先見之明自不可掩也頃者士

廣台深宋利名西二策為一考亦款曰續
能芥味惠秘之進庭子散亦人予以為前
若之友強語為好歸地之一論詳其所建
議所以其人高事法者與報議合其不止
陳也一事可以見洋學如士之廣者而為補
於事務矣是也士之廣之亦獨者也哉
高亦六年多且編月也亦不主於海學
以外為完主之屋之南宗

松園端甫書



